

第一・第二言語における韓国語未完了アスペクトの 習得過程 - 類型論と認知的アプローチの観点から -

著者	柳 朱燕
号	10
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	国博第133 号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59217

YEON
燕

学位の種類	博士（国際文化）		
学位記番号	国博 第 133 号		
学位授与年月日	平成24年 3 月27日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
研究科・専攻	東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期 3 年の課程） 国際文化交流論専攻		
学位論文題目	第一・第二言語における韓国語未完了アスペクトの習得過程 －類型論と認知的アプローチの観点から－		
論文審査委員	(主査) 教授 吉 本 啓 准教授 北 原 良 夫 教授 杉 浦 謙 介 教授 堀 江 薫 (名古屋大学)		

論文内容の要旨

1. はじめに

テンス・アスペクトの習得は動詞の内在アスペクト (inherent aspect) と強い相互作用があることは良く知られており、Andersen と Shirai は英語など多言語の習得過程を分析し、テンス・アスペクト形式の習得過程には普遍的なパターンが存在するという「アスペクト仮説 (the Aspect Hypothesis)」を提案した (Andersen & Shirai, 1994)。「アスペクト仮説」では、「過去／完了」を表す形式は最初に到達動詞 (achievement verbs) や達成動詞 (accomplishment verbs) と結びつき、「動作の進行」を表す形式は最初に活動動詞 (activity verbs) と結び付けられる一定の順序がある、という主張がなされている。また、「アスペクト仮説」は、子どもの第一言語習得においても、大人の第二言語習得においても、成立するという高い普遍性を主張している。

アジア言語においては、アスペクト仮説の検証だけではなく未完了アスペクト (imperfective aspect) の習得に焦点を置いた研究がなされてきた。特に、日本語の未完了アスペクト形式「テイル」の習得に関しては、様々な研究が行われ、多くの研究成果が出ている。しかし、韓国語の未完了アスペクトの習得を対象にした研究はまだ少ないのが現状である。そこで、本研究は「韓国語の

未完了アスペクトの習得過程」を明らかにすることを目的とし、第一言語と第二言語の両方を研究対象とする包括的な議論を行う。

2. 先行研究

2.1 韓国語の「未完了 (imperfective)」アスペクトの体系

日本語の「テイル」は「動作の継続」と「結果の状態」を同一の形式で表すが、韓国語は「動作の継続」と「結果の状態」を区別し、それぞれに「-ko iss-」及び「-a iss-」という別々形式を使う（表1）。

表1 「-ko iss- / -a iss-」の他動性による動詞分類

意味	動作の継続	結果の状態	
形式	-ko iss-	-ko iss-	-a iss-
他動性	他動詞・自動詞	他動詞	自動詞

「動作の継続」を表す「-ko iss-」は動作が現在進行していることを示している。「結果の状態」を表す「-ko iss- / -a iss-」は動作が行なわれた結果状態が現在まで持続しているという意味を示している。韓国語では「結果の状態」を表す際、他動詞である場合は「-ko iss-」に、自動詞である場合は「-a iss-」に対応する。また、韓国語は「動作の継続」を表す「-ko iss-」のみならず、現在形でも、目の前で動詞が表す動作が行われている「動作の継続」の意味を表すことができる。単純現在形が進行中の動作に言及できるのはロマンス語、ドイツ語、スラブ語においても見られる。

Smith (1997) のアスペクトの「2 構成要素理論 (two-component theory)」では、文のアスペクトの意味は、動詞とその項構造のもつ内在アスペクト (inherent aspect) と、アスペクト形式が表す視点アスペクト (viewpoint aspect) との相互作用によって決定される、という主張がなされている。以下では、まず Vendler (1957) が提案した動詞の持つアスペクト的意味の分類 (lexical aspect)、(本稿では内在アスペクトと呼ぶ) についてまとめる (4 分類の日本語訳は影山1996: 41 によるもの)。表2では、内在アスペクトとアスペクト形式の連携によって実現されるアスペクト的意味を日本語と韓国語を比較しながら概観する。

- (1) 「状態動詞」(State) - 動的ではなく、他の外力が付加されないことがない。持続的である
(例: see, know, believe, hate, want)。
- (2) 「活動動詞」(Activity) - ある持続期間を持っているが、必ずしも終わる必要がない
(例: run, swim, walk, play, sing)。
- (3) 「達成動詞」(Accomplishment) - ある持続期間を持っているが、いずれ終わる

(例：paint a picture, run a mile, make a cake, build a house)。

- (4) 「到達動詞」(Achievement)－瞬間的に起こり、時間軸のある点に焦点が当てられる
(例：lose, recognize, find, die)。

表2 未完了アスペクト体系の日韓対照

	動作の継続	結果の状態	
日本語	テイル	テイル	
	活動動詞、達成動詞	到達動詞	
韓国語	-ko iss-	-ko iss-	-a iss-
	活動動詞、達成動詞	他動詞	自動詞
		到達動詞	到達動詞

2.2 アスペクト仮説

Andersen & Shirai (1994) は、第一・第二言語習得においてテンス・アスペクトの習得は動詞の内在アスペクト (inherent aspect) に強く影響を受けるとしている。学習者は過去形態素の使用を「到達動詞」、「達成動詞」から「活動動詞」、「状態動詞」へ、そして、進行形態素の使用を「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」へと発展させていく。これを「アスペクト仮説」(the Aspect Hypothesis) と言う (Andersen & Shirai 1994)。これを分かりやすく図式化すると表3のようになる。

表3 「アスペクト仮説」(the Aspect Hypothesis, Shirai 1994)

形態素	発達順序
過去 / 完了	到達動詞→達成動詞→活動動詞→状態動詞
動作の進行	活動動詞 → 達成動詞 → 到達動詞

本研究の対象である韓国語の未完了アスペクト形式「-ko iss- / -a iss-」の習得過程を「アスペクト仮説」に照らして予測してみると、以下のようなになる。

- (5) 「-ko iss- / -a iss-」の習得過程：活動・達成動詞と接続する「動作の継続」の用法は、到達動詞と接続する「結果の状態」の用法より習得が早い。

日本語と韓国語では、表2のように高い構造的類似性を持っているため、日本語におけるアスペ

クトの習得研究を概観することは韓国語を目標言語とした習得研究に結果の予測や結果の考察など役に立つと思われる。日本語の未完了アスペクト形式「テイル」の第二言語習得に関しては、「動作の継続」用法より「結果の状態」の方が習得が困難であるという結果が様々な研究で報告されている (Shirai & Kurono 1998; 許 1997; 小山 2003)。「テイル」の第一言語習得に関しては、Shirai (1993)、Shirai (1998a)、Shirai & Suzuki (2011) の三つの先行研究で異なる結果を報告しており、一つの結論を得るのは難しい。しかし、Shirai & Suzuki (2011) では日本語の「テイル」の第一言語習得過程に親のインプットが大きな影響を及ぼすことを明らかにしている。

2.3 韓国語の第一言語習得に関する先行研究

韓国語を対象にした第一言語習得研究では、テンス・アスペクト形態素の習得に関する先行研究は多くない。Seda & Lee (2002) は韓国語を習得中の3人の幼児とトルコ語を習得中の30人の幼児を対象にし、過去形の習得パターンを観察した。その結果、韓国人幼児もトルコ人幼児も発達の初期段階では、過去形を到達動詞・達成動詞に接続するパターンであり、過去のことについて話す際、限界性 (telic) のある動詞を使う頻度が高いということが分かった。これは「アスペクト仮説」に従う結果になり、「アスペクト仮説」の普遍性が検証された。しかし、Seda & Lee (2002) の研究は過去形の習得を中心に見た研究であり、未完了アスペクトに関する第一言語習得研究はまだ行われていない。

2.4 韓国語の第二言語習得に関する先行研究

Lee & Kim (2007) ではアメリカ人学習者120名を対象にして、アスペクト形式「-ko iss- / -a iss-」の習得過程を調査した。その結果、「動作の継続」を表す「-ko iss-」が「結果の状態」の「-ko iss- / -a iss-」より早い段階で習得されることが明らかにされた。しかし、「結果状態」を表す形式「-ko iss-」と「-a iss-」のいずれが先に習得されるかは明らかではなかった。

Ryu et al. (2008) では、日本人韓国語学習者55名を対象とし、質問紙によるアンケート調査を行った。調査の結果、日本人学習者による韓国語のアスペクト形式「-ko iss- / -a iss-」の習得過程について、「-ko iss 進行」→「-ko iss 結果」→「-a iss 結果」の順に進むことが明らかになった。第二言語習得研究では、アスペクトの習得において、学習者は「動作の継続」を「結果の状態」より早い段階で習得するという結果が多数の研究で明らかにされている。Lee & Kim (2007) と Ryu et al. (2008) でもそのパターンに従う結果が出ており、第二言語としての韓国語の未完了アスペクトの習得にも、このような普遍性があると考えられる。また、「結果の状態」を表す際、日本人学習者は「-ko iss 結果」から「-a iss 結果」へと習得が進むことが観察された。これはアメリカ人学習者を対象にした Lee & Kim (2007) では見られなかった日本人学習者固有の習得パター

ンであると考えられる。この背景には、日本人学習者が日本語のアスペクト体系から類推した知識を用いて韓国語のアスペクト体系を理解する「母語の影響」があると思われる。

しかし、Lee & Kim (2007) と Ryu et al. (2008) では教授順序と習得順序が一致しており、教授順序の影響によって習得順序が決まっているのではないかという指摘があった。さらに、日本語の「テイル」の第二言語習得研究では、教授順序が逆になった場合、習得順序も通常と逆になった研究結果が報告されており (Ishida, 2004)、未完了アスペクトの第二言語習得において教授順序と習得順序の関係を明らかにする必要性が高まっている。

3. 研究課題

本研究では、第一・第二言語の習得過程を総合的に分析し、「韓国語の未完了アスペクトの習得過程」を明らかにする。本研究では以下の2点について研究を展開する。

課題 (1) 第一言語としての韓国語未完了アスペクトの習得はどのような発達過程をたどるか。

課題 (2) 第二言語としての韓国語未完了アスペクトの習得に教授順序の影響はあるか。

4. 第一言語習得研究：自然発話の分析

4.1 研究方法

幼児言語のデータは韓国語を母語として習得している4人の子どもから、1歳半から3歳半までの2年をかけて収集した。表4にデータ収集対象児の詳細を表す。全ての幼児言語データを養育者と子どもが本を読みながら対話する場面に設定し、ビデオカメラで収録した。1か月1時間のペースで収録し、2年間24時間のデータが集まれるように計画した。ビデオ撮影したものを文字化し、コーパスとして使えるようにテキストファイルで保存した。コーパスの分析はawkプログラムを利用し、MLU (1発話あたり平均単語数) または使用頻度などを分析した。

表4 データ収集対象児の詳細

	Jong	An	Joo	Yun
生年月日	2007年12月	2007年7月	2007年5月	2006年11月
性別	男	男	女	男
兄弟の有無	妹	なし	姉	なし
データの年齢	1;3～3;3	1;7～3;7	1;9～3;9	2;3～4;3
データに出てくる養育者	母、父、祖母、祖父	母、父	母、父、祖母	母

分析に利用したデータは全部で97時間30分の自然発話であり、その中から本研究の対象である「未完了アスペクト」を子どもが産出した192文と養育者が産出した2,321文、合わせて2,513文を分析対象とした。本研究に参加した4人の子ども中、Anという子どもは、データ収集の後、父から連絡があり、Anは自閉症の疑いがあると診断され、今まで治療を受けていることが分かった。そこで、本研究ではAnは「自閉症の疑いのある子ども」として扱い、他の3人の健常児とは結果を分けて分析する方針を立てた。

4.2 研究結果

各子どものデータにおける未完了アスペクト初出年齢は表5のとおりである。初出年齢は1歳11カ月から3歳3カ月までと、早い子供と遅い子供の間で1年4ヶ月の差があるが、遅い子どもでも3歳3カ月までには未完了アスペクト形式を使用している。

表5 各幼児の未完了アスペクト初出年齢と MLU

	Jong	Joo	Yun
初出年齢	1;11	3;3	2;7
MLU	2.783	2.660	2.684

MLU（平均発話長）は、単語数を発話数で割って算出する。本研究では自立語 MLU の計算法を採用し、韓国語の分かち書きを基準にして単語数を計算した。本研究の結果から MLU が2.6~2.8の段階に、未完了アスペクトを初出する可能性が高いと考えられる。また、未完了アスペクトの初出は、子どもの年齢、性別、兄弟の有無より MLU と深い関係があると考えられる。

韓国語を母語とする幼児の最も初期の未完了アスペクト習得過程を見るために、Diessel & Tomasello (2000) に倣い、各子どもの使用した未完了アスペクト文を初出のものから10例ずつ取り出した（表6と図1）。

表6 各子どもの最初の10例

	Jong	Joo	Yun
-ko iss- 進行	3 (30%)	4 (40%)	7 (70%)
-ko iss- 結果	3 (30%)	0 (0%)	2 (20%)
-a iss- 結果	4 (40%)	6 (60%)	1 (10%)
合計	10 (100%)	10 (100%)	10 (100%)

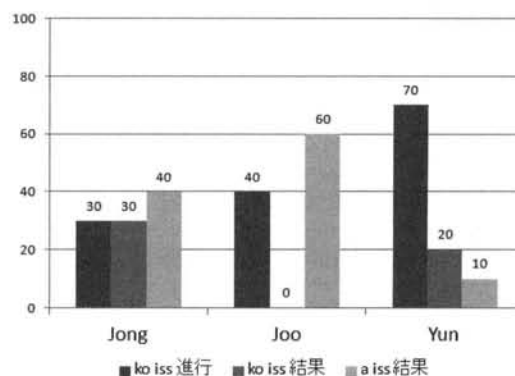


図1 各子どもの最初の10例

3人の子どもが産出した最初の10例を見ると、Yunは「動作の継続」の方（「-ko iss- 進行」）を多く使い、JongとJooは「結果の状態」（「-ko iss- 結果」と「-a iss- 結果」）の使用が多かった。従って、初期段階での未完了アスペクト習得は、「アスペクト仮説」に沿う子どもが一人、沿わない子どもが二人という子どもによって個人差が見られる結果が得られた。

データを収集した全期間において、3人の子どもの使用パターンを次の表7と図2にまとめる。また、インプットの影響を調べるため、収録全期間における養育者の未完了アスペクト使用数及び使用率を表8と図3にまとめる。

表7 全期間での子どもの未完了アスペクト使用数及び使用比率

	Jong		Joo		Yun		合計	
	使用数	使用率	使用数	使用率	使用数	使用率	使用数	使用率
ko iss 進行	18	29%	13	36%	29	45%	60	37%
ko iss 結果	16	26%	5	14%	8	12%	29	17%
a iss 結果	28	45%	18	50%	28	43%	74	46%
合計	62	100%	36	100%	65	100%	163	100%

表8 全期間での養育者の未完了アスペクト使用数及び使用比率

	Jong 養育者		Joo 養育者		Yun 養育者		合計	
	使用数	使用率	使用数	使用率	使用数	使用率	使用数	使用率
ko iss 進行	254	44%	534	63%	324	49%	1,112	52%
ko iss 結果	75	13%	105	12%	94	14%	274	13%
a iss 結果	253	43%	214	25%	239	36%	706	35%
合計	582	100%	853	100%	657	100%	2,092	100%

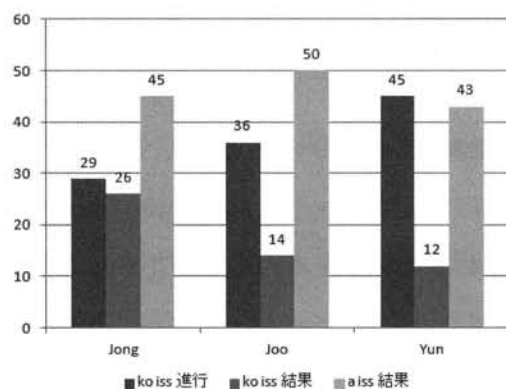


図2 全期間での子どもの使用比率

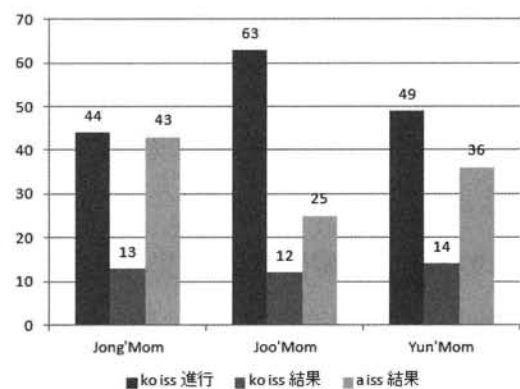


図3 全期間での養育者の使用比率

図2と図3を見ると、養育者は3人とも「-ko iss- 進行」、「-a iss- 結果」、「-ko iss- 結果」の順に多く使用している。3人の養育者は三つの未完了アスペクト形式の使用において一貫した傾向を見せている。しかしながら、子どもはJongとJooは「-a iss- 結果」、Yunは「-ko iss- 進行」を最も多く使い、未完了アスペクトの使用において個人差が見られる。以上の結果から、本研究ではインプットの影響に関して、大きな影響はないことが考えられる。

アスペクトの習得における動詞の内在アスペクトの影響を分析するため、3人の子どもが産出したすべての動詞を動詞の内在アスペクトにより分類し、使用分布を調べた。表9と図4を見ると、3人の子どもは到達動詞を最も多く使用しているのが分かる。従って、「アスペクト仮説」で予測していた未完了アスペクトの習得パターン、即ち、「活動動詞」から「達成動詞」、「到達動詞」へ使用が進んでいくというパターンは、本研究のデータからは見られなかった。

表9 各子どもの未完了アスペクト文における動詞の内在アスペクトの分布

	状態 (ST)		活動 (ACT)		達成 (ACC)		到達 (ACH)	
	回数	比率 (%)	回数	比率 (%)	回数	比率 (%)	回数	比率 (%)
Jong	0	0	13	21.0	9	14.5	40	64.5
Joo	0	0	11	29.7	5	13.5	21	56.8
Yun	0	0	16	25.0	21	32.8	27	42.2
合計	0	0	43	26.8	32	18.7	88	54.5

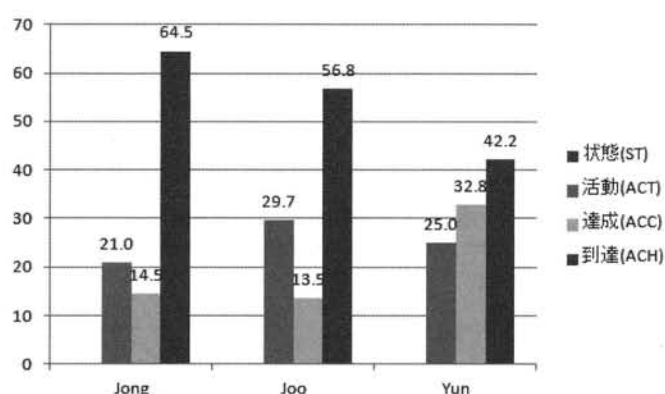


図4 各子どもの未完了アスペクト文における動詞の内在アスペクトの分布

3人の子どもが産出した193文の中、3文の誤用が見つかった。子どもたちの誤用を分析した結果、「結果の状態」の意味を表す際、他動詞に未完了アスペクト形式「-a iss-」を接続する誤りをしていることが分かった。その要因として、自他動詞の区別がまだできていないことが挙げられる。

自閉症の疑いのある An は 1 歳 11 カ月に未完了アスペクト形式を使い始め、3 歳 1 カ月になるまで全部で 11 個を産出した。An が使用した未完了アスペクトはすべて「-ko iss- 進行」であり、他の「-ko iss- 結果」及び「-a iss- 結果」は一切使用していない。つまり、使用比率は「-ko iss- 進行」が 100% になり、「-ko iss- 進行」に集中した使用を見せた（図 5）。An の養育者の使用を見ると、他の養育者と比べて「-ko iss- 進行」に少し偏った使用傾向をあり、比較的「-a iss- 結果」と「-ko iss- 結果」は使用比率は低かった（図 6）。

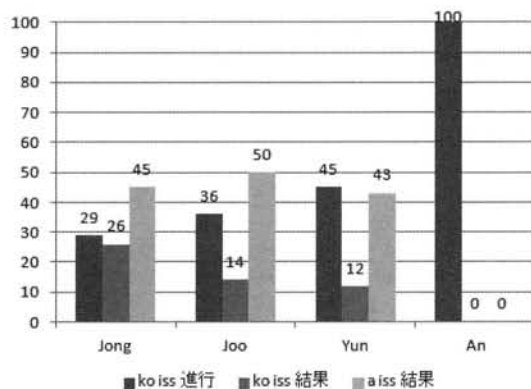


図 5 An と他の子どもの使用比率

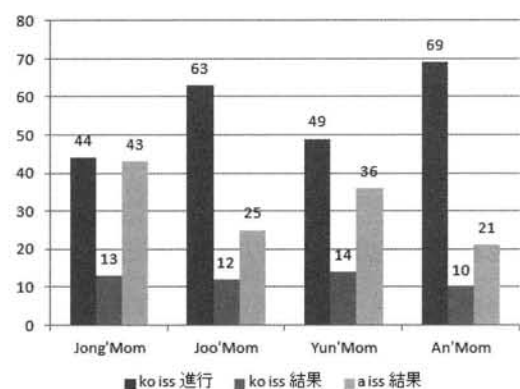


図 6 An の養育者と他の養育者の使用比率

自閉症児の言語発達に関して概説した伊藤（2005）によると、自閉症児は「一度学習した 1 対 1 対応関係に、それ以外の意味などを付加していくことの困難性を伴い、ことばの持つ様々な意味や、カテゴリー化、類推、暗黙の了解などが困難になるなどの影響を与えられている」（伊藤 2005:150）と述べている。An の場合、養育者が最も多く使用している「-ko iss- 進行」に対し 1 対 1 対応関係を作り、それ以外の意味を習得するのが困難であった可能性がある。

5. 第二言語習得研究：教授実験

5.1 研究方法

本研究の被験者は仙台所在、韓国民団の韓国語教育院で韓国語を習っている日本人学習者 33 名である。被験者は調査者が 2 年間教えた二つのクラスの学生で、同じ学習歴を持っている KFL (Korean as a foreign language) 学習者である。表 10 に被験者グループのレベルテストの結果を示す。二つのグループの被験者は同じカリキュラムで教わっているが、未完了アスペクトに関しては、一方のグループは従来の教授順序（「動作の継続」→「結果の状態」）で教え、他方のグループは逆の教授順序（「結果の状態」→「動作の継続」）で教えた。Ishida (2004) と同じく、一つの用法を教えた後、4 ヶ月後にもう一つの用法を教えた。二つの用法を全部教えた後、4 ヶ月後に調査を行い、

習得達成度を測った。質問紙は、Ryu et al. (2008) で使用した質問紙を使い、言語理解能力と言語産出能力の両方を測定した。

表10 被験者グループのレベルテスト結果

	結果グループ	進行グループ
人数 (名)	18	15
性別	17 (女)、1 (男)	14 (女)、1 (男)
レベルテスト平均値	80	82
標準偏差	12	12
学習歴	1.89年	1.87年

5.2 言語理解能力テストの結果

二つのグループの言語理解能力テストの正答率と T 検定による有意差検定を表11に示す。有意差検定の結果によると、二つのグループに「-ko iss- 進行」と「-ko iss- 結果」の正答率において有意差は見られなかった。しかし、「-a iss- 結果」の場合、結果の用法を先に教えた結果グループの正答率が進行グループより高いということが分かった。図7にグループ内の有意差検定を示す。

表11 言語理解能力テストの正答率におけるグループ間の有意差検定

	結果グループ (n=18)		進行グループ (n=15)		t 検定による有意差
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
-ko iss- 進行	7.78	1.00	7.73	1.62	t (31) =0.096, $p>.5$
-ko iss- 結果	8.56	1.54	8.20	1.42	t (31) =0.682, $p>.5$
-a iss- 結果	7.39	1.33	6.40	1.35	t (31) =2.107, $p=0.043^*$

* $p<.05$ 、5 %水準で有意、平均は10点満点

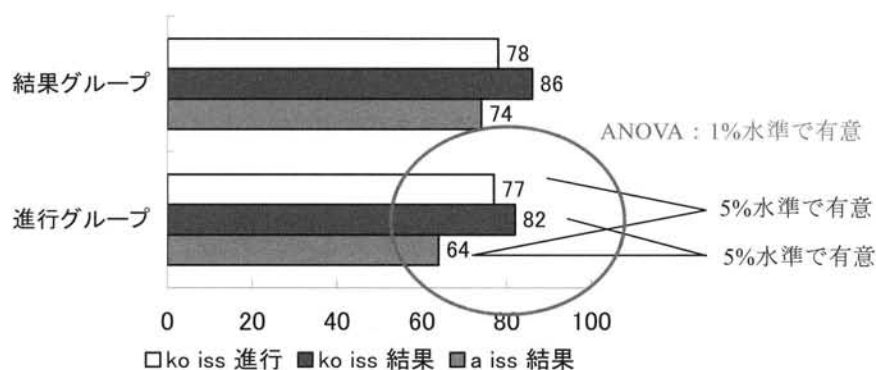


図7 言語理解能力テストのグループ内有意差検定

5.3 言語産出能力テストの結果

言語産出能力は動詞の基本形を自由に活用して書く問題なので、被験者が Target のアスペクト形式を一切使わない場合もある。本研究では一切使っていないデータを欠損値として扱い、分析から外した。その結果、結果グループは10人、進行グループは6人のデータが有効になった。グループ間の正答率と有意差検定の結果を表12に示す。表12の結果から産出能力テストでは二つのグループに有意な差見られなかった。グループ内の有意差検定は図8に示す。

表12 言語産出能力テストの使用率におけるグループ間の有意差検定

	結果グループ (n=10)		進行グループ (n=6)		t 検定による有意差
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
-ko iss- 進行	1.50	1.35	2.67	2.25	t (14) =1.307, $p=.212$
-ko iss- 結果	2.40	1.71	2.50	2.43	t (14) =0.097, $p>.5$
-a iss- 結果	1.20	1.48	0.67	0.82	t (14) =0.807, $p>.5$

* $p<.05$ 、5 %水準で有意、平均は5点満点

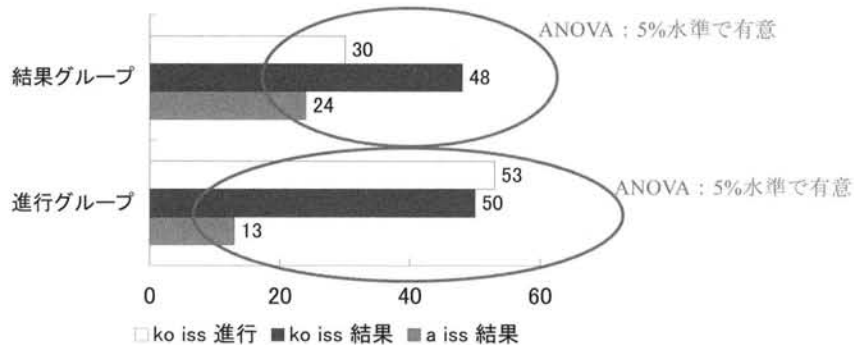


図6-8 言語産出能力テストのグループ内有意差検定（使用率 (%)）

以上の結果をまとめると、「結果グループ」と「進行グループ」におけるグループ間の有意差は、言語産出能力テストでは見られず、言語理解能力テストの「-a iss- 結果」の正答率においてのみ有意差が見られた。つまり、産出能力において教授順序の影響はないが、「-a iss- 結果」の理解能力においてのみ教授順序の影響は見られると言える。

6. 総合的考察

6.1 各研究課題に関する結果のまとめ

各研究課題に関する第一言語習得研究、第二言語習得研究それぞれの研究結果を表13にまとめる。

表13 各研究課題に関する研究の結果

第一言語 習得研究	課題 (1) 第一言語としての韓国語未完了アスペクトの習得はどのような発達過程をたどるか
	大きな個人差が見られた 二人は「結果の状態」の「-a iss-」から習得が始まる 一人は「動作の継続」の「-ko iss-」から習得が始まる
第二言語 習得研究	課題 (2) 第二言語としての韓国語未完了アスペクトの習得に教授順序の影響はあるかどうか
	教授順序の影響がある項目は「-a iss- 結果」の理解能力のみで、他の形式の理解能力と産出能力において教授順序の影響は見られない

以上の結果から、韓国語の未完了アスペクトの習得過程をまとめると、次の表14のようになる。

表14 第一・第二言語における韓国語未完了アスペクトの習得過程

第一言語 習得過程	パターン 1 : 「-ko iss- 進行」 → 「-ko/a iss- 結果」 パターン 2 : 「-ko/a iss- 結果」 → 「-ko iss- 進行」
第二言語 習得過程	「-ko iss- 進行」 → 「-ko iss- 結果」 → 「-a iss- 結果」

本研究の結果を見ると、子どもは最初から一つの形式に大きく偏って産出するよりは、バランスをとりながらほぼすべての形式を産出していた。その点が習得過程を判断しにくくする要因になっていたが、成人学習者が見せる「過剰一般化」のような極端な使用はなかった。例えば、L2 研究の産出テストでは、「-a iss-」を一切使用せず、「-ko iss-」のみ使用する学習者が16名の内7名にのぼり、半数を占めている。このことについて Slobin (1973) では次のように述べている。子どもの習得に関しても、大人の習得に関しても、まず一つの形式に一つの意味を結び付ける段階から始まる (Unifunctionality)。しかし、L1 と L2 の違いとして言えることは、「1 対 1 の結び付け (one-to-one mapping)」から「1 対多の結び付け (one-to-many mapping)」への移行が、L1 習得では L2 習得よりも短期間で起こる。これは本研究の結果を解釈する際、大きな示唆を与えていると思われる。

6.2 「アスペクト仮説」の検証

韓国語の未完了アスペクトにおける第二言語習得過程は、「動作の継続」から「結果の状態」へ進むという結果が得られ、「アスペクト仮説」に従うことが分かった。一方、第一言語習得過程では、

二つのパターンが見られ、「アスペクト仮説」に沿う場合と沿わない場合があり、「アスペクト仮説」に従うと言えない結果になった。

日本語の未完了アスペクトにおける第一言語習得過程では、習得が「結果の状態」から「動作の継続」へ進むという「アスペクト仮説」に従わない結果を報告する研究は少なくない (Shirai & Suzuki 2011)。なぜ日本語と韓国語を習得する子どもが「アスペクト仮説」に沿わない過程で習得していくかについて、類型論的観点から考察を行いたい。

Bybee, Perkins & Pagliuca (1994) は、世界の言語のアスペクトを表す文法形式の類型論的分析に基づいて、普遍的な文法化のルートとして「完結相のルート (perfective path)」と「非完結相のルート (imperfective path)」を提案した。

(6) 完結相のルート (perfective path) :

結果相 (resultative) > 完了 (perfect) > 完結相・単純過去 (perfective/simple past)

(7) 非完結相のルート (imperfective path) :

進行相 (progressive) > 非完結相 (general imperfective) > 単純現在 (simple present)

この仮説に照らして韓国語の未完了アスペクトの体系を見ると、「動作の継続」の意味は進行相 (progressive) となり、「結果の状態」の意味は結果相 (resultative) に当てはまる。問題は Bybee らの文法化のルートで分類が異なる進行相 (progressive) と結果相 (resultative) が韓国語では未完了アスペクトという上位分類入っていることである。韓国語又は日本語では「持続性 (durative)」に焦点を当てて未完了アスペクトの概念を捉えるので、進行相 (progressive) と結果相 (resultative) が未完了アスペクトに分類されるという類型論的特徴がある (shirai 2000)。それは、存在詞である「있다 issta」又は「いる」が未完了アスペクトを表す形式で現れることと関連がある。

主にインド・ヨーロッパ語 (英語、イタリア語、フランス語、ポーランド語) を分析し、テンス・アスペクトの習得過程を予測した「アスペクト仮説」では、未完了アスペクトとして進行形を捉えており、韓国語又は日本語のように結果相と進行相が両方含まれている未完了アスペクト体系にはその予測が合わない可能性がある。「アスペクト仮説」に従わない習得過程を示した理由として、韓国語の類型論的特徴が言語習得過程に影響を及ぼすのではないかと考えられる。

6.3 韓国語教育へ示唆

現在の韓国語教育では、簡単なものから難しいものへ、基本的なものから基本的でないものへと段階的に教えることがほとんどであり、その逆はあまりないようである。未完了アスペクトにおいては、より易しい項目である「動作の継続」の「-ko iss-」を先に導入し、その後、より難しい項

目である「結果の状態」の「-a iss-」を導入している。しかし、本研究では従来の教授順序を、難しい項目から教える教授順序に変えた結果、「-a iss- 結果」の正答率が易しい項目から教えたグループより高くなった結果が得られた。「-a iss- 結果」の用法は三つの未完了アスペクトの中で最も正答率が低い項目であり、習得が困難な項目であったが、「結果の状態」の「-ko iss / a iss-」を先に教えることによって、正答率が上がるという学習効果があった。今後、韓国語教育現場に本研究の結果を応用し、未完了アスペクトを教える際、難しい項目である「結果の状態」の「-ko iss / a iss-」を先に教える方法も適応することが望ましいと考える。

また、本研究の結果から「明示的な指導」の効果が検証された。実際の韓国語教育現場では、「結果の状態」の「-ko iss-」の用法は文法項目として教えていない「暗示的な指導」を行っている。本研究では、「結果の状態」を教える際は「-ko iss-」と「-a iss-」の両方を教え、さらに、二つの使い方（動詞の他動性による区分）も教えた。その結果、「-ko iss- 結果」は「-ko iss- 進行」よりも高い正答率を示し、三つの形式の中で最も高い正答率を記録した。このことから、今まで暗示的に教えていた「結果の状態」の「-ko iss-」の用法を明示的に指導する方向で教授法を変えることが望ましいということを韓国語教育現場へ提言したい。

7. おわりに

本研究では、韓国語の未完了アスペクト形式「-ko iss / a iss-」を対象とし、第一・第二言語における未完了アスペクトの習得過程を明らかにした。第一言語習得では「動作の継続」の意味から習得するパターンと、「結果の状態」から習得するパターンの二つのパターンが見られた。第二言語習得では「動作の継続」の「-ko iss」から「結果の状態」の「-ko iss」、「結果の状態」の「-a iss」へ進むという習得パターンが明らかになった。テンス・アスペクト形式の習得過程は普遍的なパターンが存在するという「アスペクト仮説 (the Aspect Hypothesis)」では、未完了アスペクトの習得過程を「活動動詞」から始め、「達成動詞」、「到達動詞」へ進んでいくと予測を立てている。これを韓国語の未完了アスペクト体系に照らしてみると、韓国語の習得過程は、「活動動詞」と「達成動詞」に未完了アスペクト形式が接続して表す「動作の継続」の意味が、「到達動詞」と接続して表す「結果の状態」の意味より早い段階で習得されるという予測が立てられる。

本研究の結果からは、第二言語習得過程は「アスペクト仮説」に従うということが言えるものの、第一言語習得過程は「アスペクト仮説」に従うパターンもあり、従わないパターンも見られ、「アスペクト仮説」に従うとは言いにくい結果になった。未完了アスペクトの第一言語習得において「アスペクト仮説」に沿わない理由としては、韓国語の類型論的特徴が言語習得過程に影響を与えているということを考察した。

論文審査の結果の要旨

第一および第二言語習得の研究において、テンス・アスペクト形式の習得に関して普遍的なパターンが存在するというアスペクト仮説が Andersen および Shirai によって提案されている。本研究は、同仮説に関しては未調査である韓国語の第一および第二言語習得について、言語習得データを収集、分析した上で同仮説が成り立つか否かを考察したものである。

第一言語習得については、4人の韓国語を母語とする幼児の養育者との対話をビデオカメラで収録して作成したコーパスにもとづいて分析を行った。その結果、習得が「結果の状態」から「動作の継続」へ進むというアスペクト仮説に従うとは言えない結果が得られた。このことは、西欧の言語にもとづいて立てられたアスペクト仮説の予測が、結果相と進行相の両方が未完了アスペクトに含まれる韓国語や日本語には合わない可能性を示唆している。

第二言語習得については、成人の日本人韓国語学習者について、通常の教授順序に従って「動作の継続」の後で「結果の状態」を教えるグループと、その逆の「結果の状態」の後で「動作の継続」を教えるグループの2つに分け、テストを行って習得達成度を測った。その結果、習得は「動作の継続」から「結果の状態」へと進むというアスペクト仮説に合致する結果が得られた。

本研究では、第一言語および第二言語の両方に関して膨大なデータが収集され、それらに対して統計にもとづく精緻な分析が加えられている。精力的かつ緻密な研究を行った努力は特筆に値する。特に、アスペクトに関する言語習得研究がいまだほとんど手つかずの状態にある韓国語についてこれを行い、アスペクト仮説の当否を検証したことは、パイオニア的な研究としての価値がある。また、成果として得られた幼児の第一言語習得コーパスは、他にも様々な研究上の用途が考えられ、単独でも学会共有の資産として重要である。

本論文において示された分析および考察は、著者が自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。